るみるうちに翻訳していく。エリアーデにしても、バシュラールにしても、カイヨワにしても、メダル・ボスにしても、メルロ・ポンティにしても、ことごとく一作のこらず、せわしなく翻訳され尽し、たちまち知識人の会話の中をその言説は駆巡し、評論家は引用してやまない〉

〈日本人の偏取のありかたは、旧態依然なのである。向う岸にあるものをこちらに引っぱろうという意志しかない。しかし、それら新風の説が、自らの足もとにある東洋を彼等が考慮することによって生まれているのに、そのことにもろくに気づかず、あたかも新風来たるとして「抽き出し」的に受容しているのであるから、世話はない〉

右二条は『円の冒険』に収める「急がば、回れ」か　抽出し人間と倉庫人間」からの引用だ。一九七八年十月に出た『印象』でかれの著書は二十冊となり、かれは四十歳になった。その二十冊には古今東西の詩人・文人・学者・画家、楽人、政治家、軍人、宗教家……の名がちりばめられており、その中にはエリアーデないしメルロ・ポンティもはいっているので、パラッとめくっただけでは、小器用博識な日本の〈知識人〉の著作ととられかねないだろうが、〈不器用〉できまじめな作品集なのだ。

とはいっても、十五年も筆で飯を食ってくれば、否応なしに文章のコツが腹にはいり、駆け引きもうまくなってくるもので、冴えざえとした筆さばきを見せるようになった。一九七九年四月に出た『素朴の大砲　画志アンリ・ルッソー』は四七〇ページの大きな本だが、見事にルッソーを描きながら草森紳一を語った。あとがきによれば二年間で書きあげたらしい。

そのかれが、十五年、千五百枚つかって、一人の詩人を書き切れずにもたもたしているとは、

なんたることだろう。

すでにもたもたと千五百枚積んでしまった今となっては、これから書く部分がすっきりすればいよいよ前のもたもたが際立ち、同じようにもたもたするのは、すっきりさせるより難事で、いっそ全く新たに書きおろすほうがよいくらいのものだが、そうしようとすると千五百枚がおれをほっておくのかと白眼をむけるだろう。草森紳一の心事、察するだにいたましい。

ひょっとすると最後まで未完の作であるかもしれず、完結しても恐らく最も不出来なのが草森紳一にとっての『李長吉伝』ではないか、という気がする。そうして、その不出来で巨大な『李長吉伝』が草森紳一の傑作ということになるのかも。

これは老い先短く、気短かになったわたしの妄言だ。

〈坂を降りれば、坂は登らねばならない〉

かれは「少女の坂」という小説を、こう締めくくっている。

降りるためにか登るためにかしらないが、李賀という坂で、草森紳一にわたしは出会った。その空間は二〇世紀という時間と交差していた。

ふしぎなような気もするが、ただそれだけのことなのだろう。

（一九八〇・五・一一・二一〇八）

李長吉歌詩補註　1980.5.12.　雑記102

杜國清氏慧投のコピーにより『文淵學報』第二巻第三・四期（一九三七年六月刊）に掲載する

左の資料を報告する。

李長吉歌詩補註十八巻附舊本五巻年譜一巻附録一巻首一巻　二十一冊　抄本

清鄞縣史　榮注　慈谿馮氏伏跗室藏

史榮字漢槎、一字雪汀、有雪汀詩十巻抄稿本已著錄（第一三〇）、此鈔首有王奎潘人瑞閔斐陳常等數跋、目錄後記云：「復古堂舊本依上黨鮑氏本詮次」。

雜記2「史雪汀注李長吉詩」23「狼狽」を参照されたい。徐世昌編『清詩滙』には史榮の作を著錄しない。

中国古典文学参考資料　1980.5.12　雑記103

いつ買ったのか覚えていないが、江西省教師函授學校編『中国古典文学参考資料』がある。上冊一七二頁、下冊四七二頁。香港　一新書店刊だが発行年月を記さぬ。復印本なのであろう。一九五〇～五五年の間に発表された諸論文を收めるから、原印本は一九五六、七年ごろに出たのだろう。この本には李賀に関する論文が無いので、ここにとりあげた。一九八〇年の中国の教師、特に中国文学系にとっては、李賀は必修の題目だろう。けれども二十数年前には、知らなくても別にどうということはなかったのだ。そのことを、この参考資料は示してくれていると思う。わたしの推測する通り、今日の中国で李賀が必修の題目になっているとすれば、それがなぜかを、見きわめる必要があろう。わたしは李賀を読むために、今の中国の人たちの李賀を見る目付にふと目をとめたのだが、中国の現代史を研究する人たちが、この著しい目付を分析していないらし

いことにも気づいて、不思議なのだ。李賀は千百五十年前の詩人だが、また現代中国の重要な詩人なのだ。なぜ重要なのか。毛沢東がそういったから、というようなことは答えになるまい。仮にそうだとしても、毛沢東がいったからなぜ猫も杓子もそれに盲従しなければならないのかという問いが出たら何と答えるか。

余談ながら、魯迅は一九一三年八月二十三日から《台州叢書》中の《石屏集》を寫しはじめ、十一月十六日に「凡十卷、序目一卷、總計二百七十二葉」を寫し畢っている。十月一日の日記に「寫書時頭眩手戰、似神經又病矣。無日不處憂患中、可哀也」としるす。『石屏集』は宋の戴復古の家集。復古は天台の人で、天台は会稽とよばれる地に属するから『会稽郡故書雑集』を編んだ魯迅の地志的興味からした作業と考えられもするが、「憂患中」に「頭眩手戰」をおして、なぜ『石屏集』を寫さねばならなかったか。あるいは「憂患」を忘れるために半ば機械的な寫書に没頭したのだろうか。その「憂患」とは何だったのだろうか。譚正璧編『中国文学家大辞典』は復古について「好游歴、當至江西武軍、有富翁愛其才、妻以女、三年后、欲帰、乃言家已有妻、女自傷薄命、作碎花詞以別、投江而死」この"重婚"によって復古を非難する声もあり、復古を葬るためにでっち上げた小説だと弁護する声もある。いずれにしても、結婚という問題が、その当事者を死に、肉体的な、あるいは社会道徳的な死に導くという問題をかかえた詩人であった。魯迅の寫書になにがしかこの問題が関わらないか。魯迅の最初の結婚についての思いとこの寫書の間になにか触れあうものがあったのではないか。わたしはある魯迅の専家に問うたが答えは得られなかった。魯迅の女性観について何か引っかかって来ないかどうか考えてもらえませんか、徒

労に終りそうではあるけれども、とたのんでみたが、賢明な専家は微笑するだけだった。結婚と写書を結ぶのは素人の間抜け推量にしても、「憂患中」の写書に『石屏集』を送んだことは専家にとっても一公案でありうるのではないか。魯迅の八十日の生命が注がれたのだ。それがなぜかと考えることは、魯迅にこだわる人なら、こだわってよい問題ではないか。わたしは愚鈍だからそのようなこだわり方で千百五十年まえの詩人を即今当前の問題としてきたつもりだが、李賀はやはり千百五十年前に死んだ詩人であり、戴復古は七百年前に死んだ詩人なのかもしれぬ。

雑記104

高奇

1980.5.13

一九七五年十二月二十五日、鍾應梅『論詩絶句甲乙集』を買った。台湾の崇基学院中国語文学系華国学会が同年四月に発行した同会叢書第七種。その「乙集」の一五五、一五六は「書李賀」

詩不因人見笑顰　詩はお世辞の道具じゃない
寧能鎖口損吾真　口に蓋して己れの素地そこなえようか
呕心直寫心中事　心を吐き出し心のなかを直写するのだ
似爾高奇有幾人　李賀よ　君ほどの高奇な詩人　幾人いよう

賀の詩は人とのつきあいのために作ったものじゃない。他の詩人の集には応酬の作がごたごたはいっているものだが、かれにはほとんどそれが見られぬ。だから俗流をかけはなれているのだ。

世ノ詩ヲ以テ名ノ為ニシ、詩ヲ以テ利ノ為ニシ、詩ヲ以テ禽犢ノ為ニスル者ハ、皆ナ俗物ナリ。一モ此ニ有ラバ、則チ性情ヲ損ヒ、靈明ヲ蔽ク。士ニ昌谷詩ヲ喜ブ者アランモ、宜ク其ノ基ヲ植

ツル所以ヲ知ルベシ。

わたしのような俗物には痛い針だ。応酬の作にもすぐれた数々の詩があるので、いちがいにそうも言いきれまいとは思うが、高処に立って大観すれば、あるいは末代以後の黄河の砂ほどもあろう詩集を片っぱしから読んでゆくと、こうつぶやきたくなるだろう。李賀のように、いい詩を二百二、三十首のこしてくれれば、充分だ。

生氣翻從死韻回　　かれの詩の生きいきした味わいは「死」字の韻からやってくる
王孫眞有不凡才　　この公子はじっさい非凡の才能をもっている
乍看石破天驚語　　石が破れて天が驚くような語を見せつけたかと思うと
又見春風染柳梅　　また　春風に柳や梅を染めている　といったふうだ

賀は好んで「死」字の韻を用いる（このことはわたしも拙稿「十二月楽辞」で述べた）「雁門太守行」「浩歌」「童初二年中」「湘妃」「平城下」皆ナ虎虎トシテ生気アリ。

「虎虎」という用字法にはじめてお目にかかった。愛知大学『中日大辞典』には「虎虎地　怒ってにくらしそうな様子で」と説明するが、ここの語感とは違う。『佩文韻府』をはじめ手許の他の辞書には見えない。

鍾氏は崇基学院の教授で『老子新詮』『易辞衍義』の二著がある由。

日本人の書いた中国文学書は読まめと称する数人の専家に鍾氏の論詩絶句について聞いてみたらだれも読んでいなかった。あの人たちはいったい何を読んでいるのだろう。

鍾氏にそそのかされて唖出愚直虚中事。これでは似爾頓馬有幾人と嗤われかねない。

1980.5.13

賀楊靈『李長吉歌詩』

鈴木虎雄『李長吉歌詩集』上の「解説」中に「李長吉詩集刊本展覧目録」が引いてあってその中に次の一条がある

22 李長吉歌詩　民国賀楊靈撰　一九三三年（民国二十二年）上海光華書局排印本　欣賞叢書之一　中田（勇次郎）氏蔵

これを見たいものだと長らく願っていたところ、近ごろ台湾の華世出版社が出した復印本を手に入れることができた。「中華民國64年10月初印」とあり、「李長吉及其詩」六十五頁、「李長吉歌詩」八十八頁。はじめに「此作費時半月，草率成篇，漏誤自所不免，尚有李長吉年譜一文，忽因祖父去世，心緒哀毀，未能竟稿；只得暫闕，容再版時補入。十八年十二月賀楊靈誌于南京」と記す。半月で作ったとは驚いたものだが、李賀概論としてまずそつなく書けていて、いまの大学院学生の模範答案みたいだ。期待しすぎたのでちょっとがっかりしたが、さかだちしても半月ではわたしには作れない本だから、やはり感心せざるを得ぬ。それにしても、いまこれを復印せねばならぬほど台湾の李賀研究は遅れているのか、という感想も浮ばぬではない。だがこれも研究の進み工合とは無関係な出版社の事情によるだけのことであろう。

さきに言い落したがこの本は横組みだ。

賀氏がこの本を書いた民国十八年は一九二九年。周閬風・熊裕芳・蘇雪林・陳培瑋・王礼錫ら諸氏が李賀について盛んに書いた時期だ。それぞれに違った個性をもった人たちだが、いまふりかえってみると、どれも互いによく似ている。これが時代の刻印というものだろうか。

法家人物

1980.5.14.

一九七七年六月二十九日、齊力『法家人物及其著作簡介』（一九七六年八月・人民出版社刊）を買った。著者の名の上に「吉林大学」と冠せてある。孫武・商鞅・孫臏・荀況・韓非・賈誼・晁錯・桑公羊・王充・曹操・諸葛亮・劉知幾・柳宗元・劉禹錫・李賀・王安石・沈括・陳亮・張居正・李贄・王夫之・龔自珍・魏源・嚴復・章太炎がとりあげてある。李賀には一七五―一八四の十頁があててある。題は「唐中葉著名詩人李賀」

李賀は唐中葉の徳宗・順宗・憲宗の三朝に生き柳宗元・劉禹錫らとほぼ同時。おそく生れ早く死んだので王叔文らの法家集団には参加しなかったが、その歌詩によって尊法反儒思想を表現し、当時の地主階級革新派の保守派に反対する路線闘争に参与した。

「猛虎行」「公無出門」「呂将軍歌」「感諷六首」「致酒行」などには藩鎮（地方軍閥）の割據に反対し、国家の統一を衛護しようとする意思があらわれている。

「世上英雄本無主」（浩歌）は反動儒家の鼓吹する「天人合一」「君権神授」説に反対するもの。「秦王飲酒」は秦の始皇の英雄形象を塑造したもので尊法傾向のあらわれだ。

魯迅は李賀を評論して「人生最大の苦痛は夢醒めて、歩むべき道のないことだ」といった。かれは「感諷五首」や「老夫採玉歌」などに官僚や大地主の收奪を、「上雲樂」「茉莉樂」などに皇帝や貴族の荒淫逸楽を暴露したが、「唐諸王孫」などと自称し、没落貴族の情調を引きずり、素朴唯物主義的観点から、いつも人生飄忽の感を作品に流露した。

ざっと右のような論である。わたしは李賀に反儒的傾向があったことには同意するが、この論

者のいう「法家」がすっきりと頭にはいってこないので、李賀が「尊法」であるということにも判断を下しにくい。「秦王飲酒」を秦皇頌歌と見難いことは拙稿「秦王飲酒」に述べた。「唐諸孫」などの自称は自嘲の気味で発せられた場合が多く、それぞれをも少し文脈に即してこまやかに分析してみることが必要だろう。

近ごろ『光明日報』の広告に出る吉林大学の学報にこの人の名が見えないようだ。

李賀詩選

1980.5.14.

上海市橡胶工業公司・上海師範大学中文系　李賀詩選注組『李賀詩選』は一九七八年四月、人民文学出版社刊で、同年九月二十七日に買った。前言十頁、目録三頁、本文一三八頁。

前言は、その趣旨において斉力氏とほぼ同じ。言葉はもとより同じではないけれども。

本文には、雁門太守行・秦王飲酒・走馬引・金銅仙人辞漢歌・嘉主簿行乗・公莫舞歌・猛虎行・公無出門・上之回・呂将軍歌・感諷六首（其三、其四）　老夫采玉歌・蘭家洞・羅風曲・宮娃歌・感諷五首（其一、其二）・三月過行宮・牡丹種曲・采華歌・羅浮山人与葛篇・楊生青花紫石甕歌・五粒小松歌・夢天・天上謡・古悠悠行・苦昼短・払舞歌辞・神絃・官街鼓・李憑箜篌引・出城寄権璩楊敬之・示弟・浩歌・秋來・南園十三首（其四、其五、其六、其七）　馬詩二十三首（其一、其二、其四、其五、其九、其十一、其十二、其十五、其十六、其十八）、致酒行・長歌続短歌・昌谷北園新笋四首・昌谷読書示巴童・巴童答・崇義里滞雨・開愁歌・春帰昌谷・野歌。

いずれも前に解題、後に注釈がある。「感諷五首」の其三を採っていないのが興味ふかい。

通志堂集

1980.5.14.

ことし二月二十六日、納蘭性德の『通志堂集』二十巻を入手した。一九七九年二月に上海古籍出版社が刊行した『清人別集叢刊』(のひとつ)上海図書館蔵清康熙刻本による影印平装本だ。ながい間、読みたく思いながら読みえなかった。この叢刊は線装帙入りの精装本も出ているが、わたしは平装本で満足することにした。

性德(一六五五―一六八五)原名成德、字は容若、満洲正黄旗人、大学士明珠の子。康熙十二年(一六七三)進士。官は侍衛。清詞中の代表作家だが、詩文にもすぐれることはたれもが認めるところだ。巻四、五言排律に「和唐李昌谷恼公詩原韻」がある。

洞戸層層碧雕闌處處紅屏山開孔雀綺石綴芳叢麝氣安黄小蛾眉點鬟濃纖腰欹柳帶蓮思展蕉筒粉盒調湘芷瓷鉼插水茨宿枝尋曉蝶畫葉爱春蟲被浪翻雲葉惟雲鬟紫耳畫眠妝復整晚浴汗初融羅襪宜來霧仙裾可赴風寄詩搴芍藥擎紙研芙蓉覘拂琉璃匣香熏翡翠籠嬉花蝶憂鶴心異到荷蜂乍見波先注佯羞意若蒙投核噬北里抱布炫南賓華燭然青鳳文因藉綠煙柔擬美樣手笑映月如弓詎信爲行雨還疑化彩虹尊中遊洛浦意外到崆峒只合巫山住何須石窌封但期常比翼即似隊來龍續續更催箭丁丁漏盡銅誓要長久約密訂任來蹤溱洧明星隱咸池旭日烘霞光生綺縠樹色鮮青苔書氣膠投漆離情淚染楓王昌聯井舍宋玉隔牆墉露浥桃初綻風披李正濃異香尊壽斝鳥莫過馮驚影昏秦鏡鵲絃解罰桐白頭吟早就黄耳信無從苔滿斜紋砌塵凝刻瑣櫳暗添瑶瑟怨漸減雪肌豐郎性鄙秋帶儂操勤晚菘邀歌嗔俾婢買卜倩騶僮水面窺金鯉樓頭望玉驄自憐江柳態誰憶海棠容盡日懷將仲無時見子充賠遣傳陌上期送說桑中四葉栽新袖三花翦細鬟笑言知宴宴棄置嘆卬卬鸚鵡聲猶喚鴛鴦夢少過

夜將愁共永春興意俱融寫恨盈千疊思君不再逢挑燈增懊惱依枕即惺忪鏡聽何曾吉瓢占併是凶凄涼憐永夜寂寞類深宮獨寤悲青女燒香問碧翁合歡虛舊繡連理悔重縫薄命嗟秋扇傷心泣曙鐘代題閨裏怨未覺錦囊空

うまいものだ。原作と確行して恥じない作といえよう。注家王琦の理解しなかった「惱公」の婉密を詩人性徳は感得しているのだ。巻五、「記征人語」の

青燐點點欲黃昏折鐵難消戰血痕羣甲玉袍看繡盡九歌原自近招魂

には李賀の「長平箭頭歌」のおもかげがうつっている。巻十四の「昌谷集の後に書す」にいう。

嘗て呂汲公の杜詩年譜を読む。少陵の詩の首めて見ゆるは冬日雒城に老子廟に謁する時に於てし、開元辛巳たり。杜、年已に三十。蓋し晩成の者なり。李長吉は未だ三十に及ばざるに、已に玉楼の召しに応ず。若し少陵に比すれば生を寧ふるまで一詩も無かりしならん。然れども破錦囊中、石破れて天驚く。卒に少陵と壽を同じうし、千百年、大名を之れ重る。彭殤は一なり。優曇之華は刹那に一現し、靈椿の樹は八千歳を春秋となす。豈に脩短を計らんや。

三十一歳で死んだ性徳の言葉だけに、いっそう響くものがある。巻十六「渌水亭雜識」にいう。

李益は文名李賀と相埒し。一篇を出す毎に、樂工爭って賄を以て之を求め、聲歌を被せ天子に供奉し、天下之を図絵に施す。太子庶子の李益、同じく朝に在り。世、文章の李益と稱し以て之と別かつ。

このことはわたしも拙稿「三長吉」で触れた。巻十八の同じ「雜識」にいう。

三教中、皆な義理あり、皆な実用あり、皆な人物あり。能く尽くこれを知るも、猶ほ恐らくは

見る所、未だ古人の心事に当らず、人を伏する能はざらん。若し其の書を読まず、其の道を知らず、唯だ一家の説を恃み、口を衝いて乱罵せんは、只だ自ら其の孤陋を見さんのみ。昌黎（韓愈）の文名の千古に高出し、元晦（朱熹）の道統の自ら孔孟を継ぐすら、人猶ほ之を笑ふ。何に況んや余人をや。大抵、一家の人、相聚って、只だ一家の語を説き得るのみなるに、自ら英傑と許して、自ら孤陋を知らざるなり。読書は多きを貴び細やかなるを貴ぶ。学問は広きを貴び実あるを貴ぶ。口を開き筆を捉り、駟馬も及ばず。易き事に非るなり。

自戒の資として記録しておく。

唐詩選（中国古典文学読本叢書）

1980.5.15.　雑記109

上下両冊。中国社会科学院文学研究所編。一九七八年四月、人民文学出版社刊。上、三九一頁、下、三九五頁。上冊にはさらに二八頁の前言があり「余冠英・王水照」の署名がある。

割当てた頁数の多い詩人は、杜甫（一〇〇）李白（七一）白居易（五二）李商隠（四六）李賀（二七）杜牧（二四）劉禹錫（二二）柳宗元（一九）王維（一八）韓愈（一五）陳子昂（一二）温庭筠（一一）あとはみな一〇頁以下。詩人の価値を作品数等で計ることはできないが、いまの中国が唐代詩人をどう見ているか、を測定するための一つの資料としてこの頁数は意義がある。

李賀の作品で選ばれているのは、李憑箜篌引、雁門太守行、大堤曲、夢天、河南府試十二月樂詞（三月）浩歌、走馬引、秦王飲酒、南園十三首（其五、其六、其七）金銅仙人辞漢歌、馬詩二十三首（其四、其五、其二十三）、老夫採玉歌、昌谷北園新笋四首（其二）、感諷五首（其一）、

苦昼短、猛虎行、巫山高。

当時の詩壇は韓・柳・元・白が競争した時代で、李賀も詩歌において別に生面を開き、一家を成した。豊富な想像力と新鮮絶異な言語により幽奇神秘な意境を表現し、独創的な風格を形成し、中晩唐の詩人に影響を与えた。が、社会実践に乏しく、詩歌に反映した生活面が限られ、新鮮な用語や典故多用のため用意の所在がとらえにくく、誤解や曲解を生むのは、かれの欠点といわざるを得ない。

ほぼ右のような批評がしてある。李賀の詩が難解なことは確かだが、誤解・曲解の多くは、李賀の詩を、その文脈にそって素直に読まずに、勝手な解釈を押しつけるところから生じている。それを李賀のせいにするのはおかしいだろう。

唐詩選 析

1980 5 15.

張燕瑾著。一九七九年十一月、天津人民出版社刊。四〇四頁。二三三―二四八頁が李賀。賀についての解説は、さきの『唐詩選』とほぼ同じ。どうしてこうも同じような解説しか書けないのかと思うが、わが国のこの種の本に出てくる李賀解説も似たようなものだ。

李過整後引、雁門太守行、老夫採玉歌の三首をとりあげる。

「老夫採玉歌」と韋応物の「採玉行」を比較し、ほぼ次のようにいう。

一、韋詩の採玉夫は具体性がないが、李詩は具体的でイメジがはっきりし、老人を送んだことで、統治集団が青壮年を徴発し尽し人民を収奪するすがたが典型的に描かれている。

二、本詩は六句で、二句は官府の徵役、二句は荒山の夜宿、二句は採玉夫の家族をうたう。李詩は十二句。はじめの二句で採玉の種類、用途をのべ、後の十句は老夫の採玉生活を全写し、人物の心理、形象ともに鮮明だ。

三、本詩は平鋪直叙方式を採用しているが、李詩は豊富多彩な描写手法を使っていて、人に新奇、瑰詭の感覚を与える。

詩歌欣賞　　1980 5.16　　雜記III

何其芳著。一九六二年四月、作家出版社刊。一一五頁。「詩歌を愛好し、鑑賞力を高めようとする同志たち」への献辞があり、本文は十二に分れる。一は一九五八年九月十五日晨二時、二は十月二十日夜稿、三十六日夜修改、という風に日付されていて、八は一九五九年四月二十六日晨六時に筆をおいたもので、李賀・李商隱をあつかっている。

唐朝有两个詩人，他們的作品很有特色，历来受到推崇，近来却被有些人称为唯美主义的作家，以至被否定——他們就是李賀和李商隱。李賀集子的第一首詩就很能代表他的风格，……这首詩全篇都是描写李憑彈箜篌彈得异常比好。从它可看出李賀的詩的一个鮮明的特色：想象是那样丰富，那样奇特；用来表現这种想象的語言也很有特点，很不平常；这样就形成了一种特殊的风格。……

"女媧炼石补天处，石破天惊逗秋雨，……要有何等大胆的想象何等的魄力才能写出这样的詩句！写到这里，可以說这首詩已經达到了它的高潮，好象难以為继了。作者却又幻想好象梦入神山去教神嫗彈箜篌，彈得魚为之跳，蛟为之舞，彈得月亮里的吳剛也倚着桂樹傾听，不想睡眠，一直到深

夜的露水打湿了月亮里的玉兔。这首詩就在这种奇异而且美丽的幻想中結束了。結束了仍然很有余味。白居易的《琵琶行》对于琵琶的声音的描写是細腻、……那种描写使我們覺得自然和親切。讀着李賀的这首詩，我們或許会感到并不能知道箜篌的声音是怎样的，然而它却喚起了我們很多想象，給了我們一种奇异的美的感覚。……白居易的那种描写是現实主义的；李賀这首描写和屈原的风格相近，是浪漫主义的。同样是想象丰富，然而色采不同。两种色采不同的文学艺术都是我們的所需要的。文学艺术的价值并不仅仅在于它們能够把生活中的事物描摹得象真的一样，而且还在于它們能够在反映現实中創造出一种美的境界。当然，从《李憑箜篌引》也可以看出李賀的詩的艺术上的弱点。有許多警句，許多奇特的想象，然而連貫起来，却好象并不能构成一个很完整很和諧的統一体。那些想象忽然从这里跳到那里，讀者不容易追踪。……李賀也写过社会意义比較明显的詩，如《老夫采玉歌》、《蕭家洞》等。有些人就举出这些詩来証明他不是唯美主义的詩人。但这种詩到底很少，而且不如杜甫和白居易写得动人。李賀的长处并不在这方面。对于古代作品的思想性，我們是应該理解得广泛一些的。李賀只活了二十七岁就死了。由于生活經驗的限制，他的作品反映的現实的幅度是比較狹窄的。然而从他的詩里我們仍然看到了封建社会和有才能的人的矛盾。……在这种（關怎歌）比較奇特的风格之中表現出来的内容和精神，不是同李白和杜甫因为受到压抑而表現出的憤懣和傲岸不馴的气概很相近嗎？正是因为有这种精神和气概，他才能够写出，天若有情天亦老，酒酣喝月使劍行，这种惊人的詩句来。不能把这仅仅看作警句，仅仅看作奇特的想象。这是要有思想有反抗精神的詩人才能写得出来的。……对于爱好詩歌而又还不熟悉我国古典詩歌的人，白居易的詩是比較容易理解的，李白和杜甫的詩或許也不难接受，要欣賞李賀和李商隱的詩却可能